

分離派 100 年研究会 連続シンポジウム 第 3 回
「メディアと建築家——博覧会と商業主義のただ中で」

【日時】 2017 年 11 月 5 日 13:30-17:00

【場所】 東京大学本郷キャンパス工学部 1 号館 15 号講義室

(定員 100 名、入場無料、予約不要)

分離派建築会はなぜ結成され、なぜメディアに掲載されて「分離派式」と呼ばれるほどに有名になったのか。これまで指摘されてきた自己の創作の称揚、また帝大内の主流「構造派」への対抗ばかりでなく、商業との繋がりを考えられないか。——この見地から、分離派と博覧会、とくに 1922 年平和記念東京博覧会における分離派メンバーが設計したパヴィリオンとこれまでの博覧会パヴィリオンの比較を行い、また同博覧会に出展された「文化村」住宅、さらには博覧会場を飛び出して都市の享楽の場へ与えた影響を、建築史、美学芸術学、日本美術史などの立場から考察を交わし、分離派建築会が当時ブームとなった原動力を探りたい。

○開会： 勝原基貴(国立近現代建築資料館) 13:30-13:35

○趣旨説明： 天内大樹(静岡文化芸術大学) 13:35-13:45

●博覧会パヴィリオン編

○ゼツェッション(分離派)の導入とその意義

河東義之(小山工業高等専門学校) 13:45-14:25

明治初期以降、わが国の建築家たちは西洋建築の導入と学習に邁進してきた。その目標は早くも明治末期に一段落するが、当時は既に彼らが目標としてきた西洋建築そのものが変化を見せ始めていた。新たな構造や材料に基づく新たな西洋建築は、1900(明治 33)年のパリ万博以降、欧米に赴いた日本人建築家達や海外の美術雑誌等によってわが国にもたらされ、博覧会やマスメディアを通じて建築界に大きな刺激を与えた。きっかけとなったのは、「分離派」と呼ばれたゼツェッションである。その導入と意義を振り返る。

○平和記念東京博覧会の「分離派式」

天内大樹(静岡文化芸術大学) 14:25-15:05

1922 年平和記念東京博覧会のパヴィリオンを分離派建築会のメンバーが設計できたことは、もちろん実作の機会として貴重ではあった。しかし博覧会の他のパヴィリオンと共に建ったことで合成されたイメージ、あるいはメディアでの取りあげられ方などから、彼らの初志を周囲が十分に理

解できたとはいいいくことが分かる。本博覧会で彼らが実際に行ったこと、博覧会会場ゆえの様々な制約とともに、1914年東京大正博覧会との比較と、建築家の職能の展開と合わせて解説し、当時の日本社会が彼らに課そうとした課題に辿り着く。

●住宅／都市編

○「文化住宅」を生み出した平和博の「文化村」

内田青蔵(神奈川大学) 15:15-15:55

大正期に新しい住宅の総称として「文化住宅」という呼称が流行した。この「文化」は、様々なモノの名称と一体となっていわゆる「文化」ブームを引き起こした。「文化住宅」もその一つ。

その語源、あるいは、その名称の使用の源を探ると、その一つに1922(大正11)年に開催された東京平和記念博覧会の会場に設けられた住宅実物展「文化村」に辿り着く。

今回は、この文化村の住宅について、その概要、当時の住宅評等をもとに簡単に振り返り、その果たした意味を考えてみたい。

○大阪のイマジユリにおける分離派的なるもの——盛り場と沿線モダニズム——

橋爪節也(大阪大学) 15:55-16:35

大阪には分離派の影響を受けた建築や橋梁が残される一方、大正初期に道頓堀中座前に開店した「キャバレー・ツ・パノン(旗の酒場)」は、「白亜のゼセッション風の酒場」と呼ばれて明確に分離派をとりいれたカフェであり、同じ道頓堀の「松竹座ニュース」にもプラトン社によって分離派風のデザインが用いられるなど、幅広い都市生活に分離派の影響が浸透していたことがわかる。建築にもふれながら、美術史と都市文化史の視点から、大阪の街における分離派と“大大阪”の時代に至るモダニズムの展開を報告する。

○ディスカッション 16:35-16:55

モデレーター: 田所辰之助(日本大学)

○閉会: 田路貴浩(京都大学) 16:55-17:00